

自らを律するということ ～社会全体で人を育てるジャマイカ～

【機関紙JAM・2022年9月25日発行 第284号】

今から30数年前、中南米にあるジャマイカへ旅行したことがあります。人口は296万人、日本でいえば秋田県ぐらいの小さな国です。ジャマイカと言えば、のんびりとした陽気なイメージを持たれる人も多いのではないのでしょうか。このようなイメージとは裏腹に、ジャマイカでは「規律正しさ」が国民の価値観となっています。

ある日バスに乗った際、年配の女性が乗車してきました。バスに空席はなく、若者でただ一人座ったままの男性に乗客全員の視線が注がれました。その時、一人の乗客が声を放ちました。

「君は席を譲るべきだろう?」。若い男性は、乗客に言われたまま席を立ち、年配の女性に席を譲りました。しかし、話はここで終わることなく、中年女性が若い男性へダメ出しをしたのです。「ご両親から、礼儀正しい振る舞いを教わらなかったのか?」、「自分の祖母だったら、バスでどんな風に扱ってもらいたいか、考えてみたらどうなの?」。

この時点でバスの中にいたすべての乗客が、若い男性の家族のようになって、「しつけ」を行っていたという話です。

本来、「規律」とは家庭内で行われることが一般的です。しかし、ジャマイカでは社会全体で子どもたちを育てようとする風土を感じました。その際、社会的に共有されていたワードこそが「規律」なのです。

1930年代にジャマイカで始まった宗教的思想運動「ラスタフェリ」とそのコンセプトである「リビティ」(内なるエネルギーと生命力を高めるための自然な生き方)にも絶対に欠かせない要素となっています。これは、肉、アルコール、加工食品等を使わず、髪を自然に伸ばし、ピアスやタトゥーは避けて体を自然に保つことも含まれています。ボブ・マーリーのようなラスタファリアンや、世界中で有名なレゲエ音楽を生み出した自由な精神の創造性を支えるのは自由な「規律」なのです。

それから数年後、私は労働運動へ身を投じることとなり、尊敬する先輩から投げかけられた言葉を昨日のこのように思い出します。この世界で一人前になるには「自らを律することから始めなければならない」と…。昨今、物議を醸す社会問題が起こるたびにジャマイカでの体験と先輩からの言葉を「現世」と重ね合わさずにはられません。